癌化した舌扁平苔癬の1例

高田典彦・郷家久道・瀬戸皖一*

Malignant change of oral lichen planus

Norihiko TAKADA・Hisamichi GONKE・kan-ichi SETO*

Key words: lichen planus (扁平苔癬), malignant change (癌化)

緒言

本症は角化異常を伴う炎症性疾患であり、頻度は外来患者の0.2~0.63%で、40歳代の女性に多いといわれている¹⁾。扁平苔癬の癌化率は0.5~1.0%で、部位的に頬粘膜がもっとも多いとされている²⁾。今回われわれは、扁平苔癬の経過観察中に癌化した症例を経験したので報告する。

症例

患者: 61歳 女性。

初診: 平成2年7月■日。

主訴: 左舌側縁の痛み。

家族歴・既往歴: 特記事項なし。

現病歴: 1年ほど前から、左舌側縁が発赤していることを自覚した。当時は痛みはなかったが、初診より3か月前頃よりトマトなどを食べたあと、歯磨き粉をつけて歯を磨いた後にピリピリとした痛みを生じ、粘膜の表面が一部隆起してきたような感じがあり当科を受診した。

現症: 舌は軽度の発赤を伴い、一部乳頭の消失を伴うびらんを呈していた。右側頬粘膜には、発赤の中に白色で網目状の Wickham の線状を認めた。自覚症状として、舌側縁の接触痛を認めた。また他部位に扁平苔癬様の皮膚病変を認めなかった。

臨床診断: 扁平苔癬。

処置および経過: 臨床的にハチアズレの含そうとアネステジン、ステロイド含有のクロマイシン軟膏の局所

写真1 初診時口腔内所見

写真2 病理組織像(高倍像)

治療から開始したが局所に変化がみられず、7月■日に舌側縁部から生検を採取した。組織学的診断では、舌の上皮が肥厚し乾癬様の形状を示しているが良性の過剰上皮を示し、上皮下には密な炎症細胞浸潤を伴う扁平苔癬であった(写真1, 2)。

確定診断の後ステロイド含有の含嗽剤に変更したところ、肉眼的にも疼痛、発赤は徐々に軽減していった。翌年2月には両側臼歯にわたる義歯の使用を許可したところ、再び舌側縁の発赤を生じた。そのため義歯をはずし、鉤歯の鋭縁を削合しさらにシリコン製シートにて下顎残存歯を覆った。4月には症状の消長をくり返すも舌表面に癬痕様の Wickham の線状を残すのみとなったため、ステロイド含嗽剤の使用を中止した。しかし7月■日の定期観察時に、患側舌側縁に直径3mmの境界明瞭で、角化した糸状乳頭のような白板症を認めたためにただちに生検を行った。

組織学的診断で、扁平苔癬を示す上皮が癌化し扁平上

厚生連佐久総合病院歯科口腔外科

(主任: 高田典彦医長)

* 鶴見大学歯学部第一口腔外科学教室

(主任: 瀬戸皖一教授)

Department of Dentistry and Oral Surgery,
Saku Central Hospital (Chief: Dr. Norihiko
Takada)

* First Department of Oral and Maxillofacial
Surgery, Tsurumi University, School of Dental
Medicine (Chief: Prof. Kan-ichi Seto)

受付日: 平成4年6月1日

写真3 癌化時口腔内所見

写真4 病理組織像(高倍像)

皮膚癌となったもので、基底膜の連続性が乱れ深部に増殖を開始しているが、間質に密なリンパ球浸潤を認めるものであった(写真3, 4)。そこで連日5mg, 全量30mgのペロマイシン投与を行った後、8月■日に左舌部分切除を行った。

術後8か月を経過した現在、経過良好である。

考 察

扁平苔癬からの癌発生について Bettmann (1905)³⁾が最初に報告している。Andreasen (1968)⁴⁾や、LaufferとKuffer (1970)⁵⁾の報告によると癌発生率が10%に及ぶとする報告もあるが、通常発生頻度は、0.5~1.0%で40歳以上の女性が多いといわれている。扁平苔癬が前癌状態か否かは意見の別れるところだが、本邦では悪性転化に関する報告は少なく、池村⁶⁾も51例の臨床的観察を行い、その中で悪性化はないと述べている。Banoczy²⁾は、扁平苔癬が悪性転化する重要事項として、2つの要因があり、1つは病変の再燃による口腔粘膜の易損性、もう1つは病変の存在期間が通常10年以上と長いことをあげている。また扁平苔癬と白板症の同時発生に関する報告も多いことから⁷⁾、臨床的にも組織学的にも白色病変としての鑑別をつけておくことが重要であると思われる。

しかし今回の症例では、びらん型とはいえステロイド療法にて軽快してからの発生であること、扁平苔癬とし

て2~3年の経過であること、機械的刺激源として考えられる義歯をはずしてから発生していることから、扁平苔癬の癌化症例と考えられる例であった。

結 語

われわれは、舌、頬粘膜扁平苔癬の経過観察中に癌化した1症例を経験したので報告した。

引用文献

- 1) 宮崎 正, 編集: 口腔外科学. 医歯薬出版, 東京, 1988, 95頁.
- 2) 白数力也, 他訳: 口腔白板症. 医歯薬出版, 東京, 1986, 113-126頁.
- 3) Bettmann, S.: Beitrage zur Kenntnis des Lichenn ruber planus. Arch f Derm Syph 75: 379 1905.
- 4) Andreasen, J.O.: Oral lichen planus. I, A clinical evaluation of cases. OS OM OP 25: 31 1968.
- 5) Lauffer, J. and Kuffer, R.: Le lichenn plan buccal, Masson, Paris, 1970, p 82-90.
- 6) 池村邦男: 口腔粘膜の扁平苔癬に関する臨床的ならびに病理学的研究. 口科誌 21: 555-581 1972.
- 7) 丸茂町子: 口腔粘膜扁平苔癬の研究—特に、卵胞ホルモン治療について. 日口外誌 23:97-120 1977.